

ある時計商のこと

—明治初期に生きた桐生の人たちと
その時代—近常と福島屋、そして、
新居日薩—

平 伊佐雄

佐藤 研一

一、時計の話

開国以来、西洋の物品が軒並み日本に上陸するようになったが、時計もその例に洩れない。^②幕末から明治初期の日本は、西洋の物品を輸入するだけでなく、西洋の製品と同質のものを国内で製造できるよう試行錯誤を重ねてもいた。この頃は、日本の産業史の見地から言えば、西洋の技術を学びつつ、国内の産業を育んだいわゆる殖産興業の時代として位置づけられるだろう。そして、明治初期からのこれら一連の動きは、その後の日本の工業化に大きく寄与することになった。^③ただ、明治時代における日本のこの動きは、近代化と言うよりも西洋化と捉えた方が適切かもしれない。

一八七二（明治五）年、東京では、銀座の大

火事件の後、銀座に煉瓦街を建設する計画を実施し、国にあつては年末に改暦を行い、グレゴリオ暦を導入した。改暦の影響もあつてか、時計の製造や販売も江戸時代に伝来した機械式時計を和風にアレンジした「和時計」ではなく、西洋式の時計そのものを模倣して製造したり、西洋の機械時計を輸入し、販売する機運が増したのである。^④

現在、日本の時計と言えば、銀座の服部時計店、現在のセイコーが頭に浮かぶのが一般的だと思われる。^⑤しかし、明治の初期には、西洋の機械式時計の製造を試みたり、外国人輸入商から輸入したり、自ら製造しようとした人物は、かなりの数に上り、東京の時計店だけでも数十店は存在していた。^⑥日本の時計の歴史について、多くの研究成果を残している平野は、明治期に時計店を開業した人々の大部分は、江戸時代の時計師とその下職たちが更生した姿であり、前代の和時計工業が廃滅した後には、時計の普及にあたり彼らの中で資本の多い者は、横浜居留地の外国人時計貿易商から洋時計を仕入れて卸売りや小売りに携わり、資本が少ない者は洋時計の販売や修理に従事したと述べている。^⑦では、最初の日本人による洋時計の製造は、何時、誰によるものなのか気になるところであるが、何事もことの始まりは、後から振り

返つてみると薄闇なるごとくであり、断定はなかなか難しい。

幕末・明治期において、江戸時代から機械式時計に触れていた日本の時計師たちの存在はあった。しかし、その製造については、分業や機械化が進んだ欧米の生産技術と日本の技術の差は大きく、和時計師の技術では輸入された欧米の時計と市場で競争することが難しかったと言ふ。^⑧明治初期において、和時計ではなく西洋式の時計を扱った時計店は、服部時計店の創業者服部金太郎の関連で挙げると、金太郎が幼い頃に覗いて見た小林伝次郎の小林時計店、金太郎が年季奉公に入った亀田時計店、金太郎が修理や販売をこなした坂田時計店などである。坂田時計店は、当店が倒産した折、従業員であった服部金太郎が自分の貯蓄を御礼として主人に差し出したことが、関係者間で美談として語られたと言われる。^⑩いずれにせよ、明治初期において、多くの時計商や修理、製造業者が存在したことは間違いない。一般に洋時計の国内での製造に関しては、掛時計から開始され、東京では、金元社時計製作所が一八八〇（明治十三年）年に宮内省献上品たるボンボン時計を完成させたのが初めだと考えられている。^⑪金元社は、一八七五（明治八）年に麻布に開業した時計製作所であり、一八八一（明治十四）年の第

二回内国勸業博覧会にもボンボン時計を出品している。この博覧会には、他にも様々な種類の時計が出品されており、それらは、金田市兵衛の四方時計、大野徳三郎の手工懐中時計、新居常七のボンボン時計、水野伊和造の八角時計、小島房治郎の置時計といった具合であったらしい。しかし、金元社による時計を除けば、全て試作品の域を出てはいなかったと評価されている¹²。一方、海外からの輸入される時計の増加は、逆に国内での製造を喚起させたようで、一八八九（明治二十二年）年から一八九〇（明治二十三年）年には、アメリカからの掛・置き時計の輸入が十万個を超える程になっていたが、これ以降は安価になった国産の時計によって代替され、やがてアメリカからの輸入時計は市場から駆逐された¹³。

大型の掛時計の製造から始まった日本の時計産業は、明治の中期ころになると、懐中時計の製造にも取りかかるといった。懐中時計の製造では、一八八九（明治二十二年）年頃の日本橋の田中仁吉、一八九一（明治二十四）年頃の京橋区の山内住智が知られているところである¹⁴。この中で頭角を現したのが、服部金太郎の精工舎である。もちろん、時計の修理から業を起こした服部時計店もいきなり国産の量産時計を製造したわけではなく、他の時計商と同じく

洋時計を外国商館から仕入れて卸、小売りをを行い、事業を拡大していった。その後、服部は「服部時計修繕所」を構えつつ、桜井清治郎商店で働き、「服部時計店」を京橋に構えたのは、一八八一（明治十四）年のことであった。服部による時計製造会社「精工舎」は一八九二（明治二十五年）年の創業であり、柱時計や懐中時計の製造を行った。一八九五（明治二十八年）年には銀座四丁目の角地を購入し、時計塔を付けた店舗に時計店を移転させた¹⁵。その後の服部時計店の成功は周知のことである。しかし、少なくとも東京における西洋式機械時計の輸入、販売、製造は、服部金太郎が最初ではない。先に述べたように「服部時計店」は、銀座では後発であり、それ以前から輸入時計を取り扱ったり、自ら製作しようとするものたちは多数存在していたのである。

二、「近江屋」（新居常七商店）

さて、前置きが長くなったが、本稿で注目したい人物の一人目は、服部ではない。明治時代初期から活躍した時計商であり、「近江屋」の家号をもち、一般には、近常（キンツネ）と呼ばれた時計商、新居常七である。銀座二丁目に店を構えていた「近江屋」（新居常七商店）は、一八七五（明治八）年頃から鉄道寮、後には、

呉・舞鶴の海軍工廠など諸官庁の御用を務め、商館貿易によって各種精密機械や時計、工具などを輸入し、その卸や小売りで有名な商店であったと言われている。しかも、近江屋新居常七は、商品取り扱いの事業だけではなく、一八七七（明治十）年頃からは工場を設けて、ボンボン時計の製造を試みた、いわば我が国の時計産業のバイオニアの一人なのである¹⁶。

常七は、本所区林町三丁目に木造の平屋建て三棟の時計工場を設立し、アメリカのセス・トーマス製品をモデルにしてボンボン時計や八角時計を製造した。その後、日本橋の蠣殻町三丁目にも大野徳三郎と共同出資にて時計工場を設けた。この二工場を以て生産されたボンボン時計は、一八八一（明治十四）年頃の国産品としては、精巧な物であったと言われている¹⁷。

一八九一（明治二十四）年に常七は、服部金太郎とともに東京商業会議所の会員に東京時計商工業組合の候補者として推挙された¹⁸。結局、東京商業会議所の会員には、服部が選ばれたようであるが、東京時計商工業組合では、常七は二代目の頭取を務めた¹⁹。ちなみに三代目の頭取は、服部金太郎である²⁰。

以下では、明治初期の商人であり製造業者の新居常七の経歴について、少し詳しく見て行きたい。彼は一八三四（天保五）年に桐生に生ま

れ、八人兄弟の末子であった。桐生において新居家は代々、生糸を扱う仕事に従事している家系であり、常七の家も機械業を営んでいた。常七の兄の善兵衛は、幕末の頃に横浜に出て、洋物を扱う「福島屋」を開き、常七もその兄を頼り、明治の初め頃に横浜に出て「近江屋」を開いたと推察されている²³⁾。

家業が桐生の生糸売買や織物業であるとしたら、新居家が幕末から生糸の販売に携わる港町横浜との接点を持っていたとしても不思議ではないだろう。実際、横浜では、両者ともに弁天通りで商いを行っていたことが分かっている²⁴⁾。明治初期、弁天通は、生糸を扱う商人たちが集まる所として知られており、桐生の絹売買にかかわる新居家の人がこの通りに関係を持つのも当然だったのかもしれない。幕末に横浜に出てきた渡良瀬村の原善三郎、父の代に伊那郡小野村から出てきた小野光景が、店を構えたのもこの弁天通りであった。ただ、兄の新居善兵衛は、一八七一（明治三）年に他界し、「福島屋」は善兵衛の息子の國太郎が継いだ。興味深いのは、「福島屋」も「近江屋」も、生糸商ではなく、機械の輸入商を始めたことである。なぜ時計の輸入を行ったのか、その理由は定かではないが、両者共に何かしら新しい事業に意欲的な人物であったのだろう。「近江屋」の常七が横

浜に店を構えていた期間は短く、一八七三（明治六）年には、東京に移転している。しかし、明治初めに横浜で時計商といえ、邦人では一八七〇（明治二）年創業の若松治助、金森柝吉、小島房治など数名に過ぎなかったとのことであるから、常七の先見性を垣間見ることが出来るだろう²⁵⁾。東京に移った常七は、まず、仲橋付近に店を構え、後に銀座の二丁目三番地に店



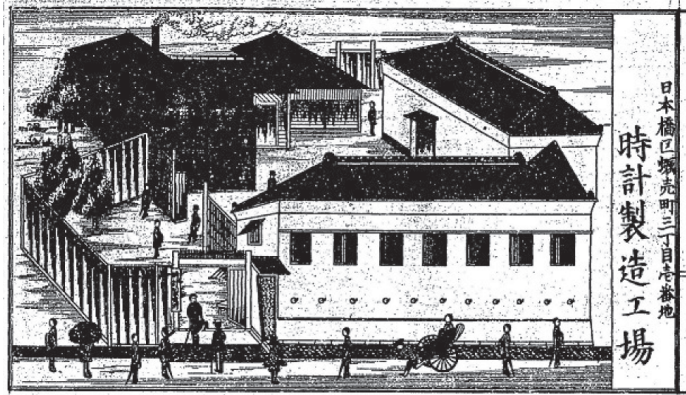
『東京商工博覧絵 第二編 下』五十頁（左）
転載：国立国会図書館デジタルコレクション
NDL 書誌 ID 00000452941

を再移転させたようである²⁶⁾。「近江屋」は、一八八三（明治十六）年八月七日、十九日の読売新聞紙上に「掛時計製造販売広告」として同じ内容の広告を出している。業務の内容を垣間見ることが出来るものなので、その一部をそのまま引用、紹介しておきたい。

「過般来弊店に於いて掛時計製造の業を興し日本橋区蠣壳町三丁目に製作工場を設置し漸く諸機械等此程全備瓢箪形八角形夫々試製仕候諸職工追々熟練一層良品出来仕候間多少に不限御愛顧御購求之程伏て奉祈望候且場内へ鍛工輻輳工齒車割方等に分て時計属品其他何品によらず諸君御便利を旨とし御注文に任せ製作仕候木工製作日本風は勿論洋風製作器械備附候に付御注文次第製作仕候当分場外に塗職並鑄工所を置き製作仕候間御好御注文次第

右之通り時計は勿論其他御注文品精々注意廉売を以製作奉差上候間多少に不限陸続御購求あらんことを乞」時計及工道具、測量器械類、図書用具類商店 新居常七 家号 近江屋」

この広告からは、「近江屋」が国内での時計製造に意欲的であった様子、器械類、図書用具も扱っていたことが分かる。この商品の多角化は、常七の発明家肌がそうさせたのかもしれないが、後に述べる常七の兄弟への貢献を考慮すれば、納得できる内容でもある²⁷⁾。



日本橋区城売町三丁目番地
時計製造工場

『東京商工博覧絵 第二編 下』五十頁(右)
転載：国立国会図書館デジタルコレクション
NDL 書誌 ID 000000452941

一八八五(明治十八)年版の『東京商工博覧絵 第二編 下』には、本店の「測量機械 画学用品 時計及工道具 商店 近江屋常七」(銀座二丁目三番地)の店舗と支店である「硝子板鏡板及額縁 商店 近江屋常七 支店」(銀座三丁目九番地)、時計商大野徳三郎と共同出資で設立した時計製造工場(蠣壳町三丁目一番地)の絵図が載っている。²²⁾

三、新居家の人びと

本稿で注目すべき人物は、群馬県の桐生から横浜や東京に出てきた新居家の人たちであるゆえ、新居家についても紹介しておかねばなるまい。

桐生において新居氏は、「桐生の草別で、桐生四天王の一言われている」と新居せいが子供たちに話したとされる程、桐生では一目置かれた家系であったようである。²³⁾『桐生織物史』

や『桐生市史』では、十八世紀に起こった桐生絹市立替や京都西陣の新機織法を桐生へ移入した功労者として、新居藤右衛門と弟の治兵衛の活躍が詳細に述べられている。²⁴⁾この新居藤右衛門兄弟は、新居善兵衛や常七の父祖にあたる。新居藤右衛門は、当時の桐生において絹買次と酒造を生業とする有力者であり、その藤右衛門は、一七三〇(享保十五)年に桐生絹市を玉上

甚兵衛と共に大間々で四八日に開かれる絹市に對抗し、元々五九日に開かれていた桐生の生糸市日を一七三七の日に変更させた立役者であった。²⁵⁾この市立替によって、桐生の絹市が大間々々の市の前日に開かれることになり、桐生の市は活性化したと言うのである。さらに藤右衛門は、一七三八(元文三)年に弟の治兵衛と共に京都西陣織の織物師を桐生に招き、新機織法の導入と

その普及に尽くした。『桐生市史』では、「ここに桐生は京都西陣と拮抗し得るに至ったのである。実に藤右衛門のたまものと言うべきである。」²⁶⁾と藤右衛門の実績を高く評価し、さらに「この市立替後七年の元文三年、京都より新機織法の移来により、桐生絹市は紗綾市と称せられ、ここに空前の発達をなした。」と桐生の織物業発展への貢献を記している。桐生での新居氏は、織物業に関係した名家としての地位をもっていたことが確認できるだろう。

その後、およそ一世紀余の後、幕末明治期に活躍するのが件の新居家の人たちである。その家族構成をここで示しておきたい。²⁷⁾

新居善左衛門繁長(文政十二年没) 機職屋

／直(妻)

七人の子の内

せい(妻)(文久元年没)

／宗左衛門(婿) 山田郡大間々村北村の伊勢屋

子八人

長男 繁太郎(天保十三年没)

次男 由兵衛(仙七郎)(明治十一年没) 由兵衛は、江戸の呉服屋に奉公に出て、支配

人格になるが、帰郷し、佐羽に勤めた。

／まさ(妻) 前橋の生糸商岩崎家の娘 親

戚 岩崎 作太郎

子三人

良介 こう久

三男 寛三郎（嘉永元年没）

四男 幸五郎（弘化五年没）

五男 善兵衛「横浜弁天通福島屋」〔明治三年没〕

／アサ（妻）

子二人

國太郎（大正十一年没）

／とく（妻）

みね（子）アメリカ帰りで池上光明館

曙 元祖

六男 林之助「日薩」〔明治二十一年没〕

長女 るよ・類興（大正三年没）

子二人

とく（明治二十七年没）國太郎の妻

のぶ（明治十年没）

七男 常七「近江屋近常」〔明治四四年没〕

／みね「峰」妻（明治二十六年没） 〓由兵衛

の妻であるまさの妹

子四人

たけ（長女）／源治郎（婿） 近常商店支

店を経営

せい（次女） 時計貿易商鈴木次郎に嫁ぐ

安太郎（長男）（慶応三年没）

盛之助（次男） 二代目常七 〓常七の男子

は常七銘を継ぐ

四、新居日薩

この新居家の六男は、幼名林之助と言ひ、後に日蓮宗（一致派）の初代管長となり、日蓮宗の三傑の一人と仰がれ、立正大学の学祖として位置づけられる新居日薩そのひとである。

日薩は、一八三一（天保元）年生まれ、吉田松陰と同年の生まれである。九歳で秩父の浄蓮寺に入り、十一歳の時に飯高檀林に入檀、十九歳の時には金沢の充治園に入った。一八五五（安政二）年、二十六歳の時に江戸に戻り、駒込の承久寺の住職となる。その後、神楽坂善国寺住職や承久寺住職、池上南谷檀林の講師などを務め、日薩三十九歳の時に明治を迎えた。³⁶

明治維新の後、明治政府が仏教界に与えた影響は大きかった。明治政府は、神仏分離令の発布や廃仏毀釈などの神道国教化政策を押し進めたからである。仏教界では、外国から入ってくるキリスト教に対抗する必要もあり、宗派を超えた諸宗同徳会盟を発足させた。この集まりは、仏教復興活動の一つに数えられ、日薩は、一八六九（明治二）年に増上寺山内で開催された第二回諸宗同徳会盟に参加している。ここで日薩は、討議された八箇条の内、二箇条を提議したとされる。自宗旧弊一洗論と三道鼎立鍊磨

之論である。自宗旧弊一洗論は、大胆な内容で、寺院僧侶が多いのは、法を衰微させる基であるとして、僧侶を減らす案である。量より質を重視する考えととれるものである。また、三道鼎立鍊磨之論は、神儒仏の不可分の関係を述べたものである。³⁷ 諸宗同徳会盟の結成とその動きは、キリスト教の流入に対抗する点で明治政府と共通利害があることから、政府による廃仏を緩和する役目も担っていた。さらに一八七二（明治五）年の大教院の設置は、仏教界による積極的な形での仏教の命脈を保つ戦略でもあった。³⁸

政府の宗教政策は、仏教界からの反発も大きく、政府側も一八七二（明治五）年三月に神祇省を廃止し教部省を発足させた。教部省は、儒教や仏教を取り込む形で民衆の教化を行うことを目的とした機関である。同年四月には、僧侶を教導職に任命し、教化の担い手とする教職制度を設けて、三条教則による国民教化活動を進めた。この動きの中で仏教側は、一八七二（明治五）年五月に教員養成機関として大教院・小教（院）の設立を政府に建議し、許可されることとなった。³⁹ 仏教側の対応としての大小教院の設置は、「大教院ヲ設け神道ヲ始メ釈漢洋諸科學ヨリ宇内各国ノ政治風俗農功物産ニ至ル迄悉ク之ヲ講習シ海外ノ講師ニ愧サラシメ人材ヲ楨育シ頑固迂僻ノ悪習ヲ一洗シ今日実用ノ学ヲ起

サシメ且又府県に小校ヲ置其制ハ大寺院ニ倣ヒ文明開化ノ氣運ヲ領シ家毎ニ説キ戸毎ニ諭サバ縦令ヒ奸民有リテ愚民ヲ煽動スト雖之ヲ施スニ術ナカラン」とあるように、政府の神仏合同教化に歩み寄りを見せる形での提案であるようにみえる。ところが、仏教側による大寺院の設置提案に対して、教部省側は仏教側と異なっており、積極的ではなかったようであり、大寺院を「神仏混同の寺院」とすべき建白書が出て、ひとまず神仏合同の機関となったものの、これも神道側からの反発、仏教側では島地黙雷の大寺院分離運動も始まり、結局、この試みは、一八七五（明治八）年に潰えることになった。⁴¹ その間の事情を少し丁寧に見てゆぐため、一八七二（明治五）年に戻って、仏教界の動きを見てゆこう。

大寺院の設置は、廃仏毀釈に対する仏教側からの押し返し、しかも、そこで重視されたのは人材の教育や民衆教化であった。仏教側からしてみれば、そこには、僧侶の教育を行い、僧侶の存在意義を示す期待がかけられていたと推察される。しかし、大寺院の許可後、大寺院は、直ぐに神仏合同機関としての色を持ち始め、廃仏的な大寺院の姿が浮かび上がってきた。他方で、大寺院の設置はさまざまな反発もあったことから、各宗も別々に人材育成の寺院を設立す

る動きを見せたのである。

日蓮宗では、大小寺院の設置認可後、独自に小寺院を承教寺に設けた。一八七二（明治五）年七月に発起者である日健、日運、日因の三名を中心に宗門各派の住職が集まって建議をし、同年八月に開講したとされる。⁴² 小寺院の学級制度は、上中下の三区分で、各級に教師と助教が付いていた。はじめは、上級助教に蓮華寺公、中等教師に妙経寺公が就き、中等助教に文明院（＝新居日薩）、下等助教として、妙寿院と妙地院（＝久保田日亀）が就いた。⁴³ 小寺院では、三条教則に教義を蹂躪することなく講義が行われたようである。一八七四（明治七）年には中寺院が出来はじめ、大寺院に対して各自独立の気分が兆し、合併寺院という言葉と派内寺院という言葉が交錯する状態になったと云う。政府によって信仰のあり方や教育のあり方に新しい基軸が持ち込まれ、仏教側でもその対応に迫られたが、各宗によってその対応は様々であったようである。

一方、大寺院の方は、いろいろと躓きを見せしており、一八七二（明治五）年十一月に麹町区尾井町元紀州侯邸に政府の大寺院を設置、一八七三（明治六）年四月に増上寺に移り、同年六月に開院式を行った。開院式の際には、神仏各講中講社が積極的に参加した。日蓮宗信徒も同

じくこれに参加し、太鼓に合わせて題目を高唱し、神殿に上ろうとした。それを制止しようとした神職に怪我を負わせてしまい、日蓮宗管長の顕日琳に唱題群行禁止令が言い渡された。さらに、一八七四（明治七）年に、同じ内容で通達が出された。⁴⁴ 大寺院騒動から十ヶ月も経って、再度、通達で禁止令が出た理由として、浜島は、この時の日蓮宗（一致派）管長は日薩であり、日薩と講中は密接な関係があったから、教部省は大寺院騒動の首謀者の一人として日薩を捉えており、意図的に管長に就任した時を選んで、日薩を牽制したと述べている。⁴⁵ いずれにせよ、いろいろな反発を抱えた神仏合併の大寺院は、一八七五（明治八）年、その役目を果たせずに解散することになった。日蓮宗では、この大寺院の廃止とともに、小寺院から名称を変更していた日蓮宗大寺院を六月に日蓮宗大寺院と改め、この日蓮宗大寺院を頂点にして、中教院、宗学所（小教院）を全国各地に設置した。⁴⁶

一八七三（明治六）年、日薩は新たな取り組みに拘わることになる。それは一八七二（明治五）年に真宗大谷派の鶉飼啓潭が名古屋監獄で、大谷派仰明寺対岳が巣鴨監獄で始めた囚人の教誨活動への参加である。一八七三（明治六）年には真宗本願寺派の船橋了要も岐阜監獄において教誨を行っている。教誨は、教導職制

規程にある民心善導策の一環として始められ、真宗の本願寺派と大谷派がリード役を果たしていたとされる。^{④9}一八七三（明治六）年七月、千葉県が置かれることに伴い、寒川村に米倉を修理した未決監、既決監が設けられた。^{⑤0}その際、顕本法華宗坂本日桓と浄土宗石井実禪が監獄布教を成すことを志し、県下の各宗に支援を求めた。これに応じたのが、真言宗金山堯範と日薩であった。浜島は、「真宗以外の各宗派が結束しての教誨事業は全国的にも希なケースであった。日薩は啓潭、対岳、了要等とほぼ同時期に教誨に携わり、日蓮宗教誨の始祖と言える。」と述べている。^{⑤1}

さて、開国の後、明治政府や仏教界は、流入するキリスト教に対して警戒感を抱いていた。仏教界では、一八六八（明治元）年に諸宗道徳会盟を結成し、宗派を超えてキリスト教への対抗策を協議したことは、先に述べた通りである。一八七三（明治六）年二月には、政府が日本におけるキリスト教の禁教措置を解いたため、^{⑤2}仏教界ではその緊張感はさらに増したと考えられる。

幕末から明治初期に渡来したキリスト教の各会派は、布教活動と共に、教育事業や社会福祉事業を展開し始めていた。その中でも早くに事業を開始したのは、パリ外国宣教会の神父ブ

テイジャンが要請し、フランスから派遣された修道女たちであった。一番最初に来日したのはサン・モール修道会から来た五名の修道女たちである。折しも一八七二（明治五）年六月のことであった。^{⑤3}来日したサン・モール修道会の修道女たちは、孤児や捨て子、困窮した子供たちを預かり養育する事業を展開することになる。五ヶ月後には、千坪の土地を山手に借り、収容施設を設けた。そこは仁慈堂と名付けられたと言う。拡大する救済活動に対して修道女たちは、さらに土地を借り受けて孤児三百五十人と乳幼児八十人を収容できる施設を設置し、一八七五（明治八）年には正式に孤児施設として認可された。^{⑤4}また、パリ宣教師会は、築地を拠点とした布教活動を開始し、一八七五（明治八）年にはサン・モール会が築地居留地に孤児院と寄宿学校を開設した。^{⑤5}

これらキリスト教の聖職者たちの活動を目的あたりにして、日薩は、一八七九（明治十二）年八月十三日の三村日修への書簡において、「…耶蘇教の育兒院救貧会等は既に設立に相成居り皇国人を救済候也然るを内国人にして之を座視するは皇国の大恥と確信候況や教法社会の人に於いて之を苦思せざるは教法の本意を弁知せざる者と謂へし吾身飽食暖衣し傍らに凍餒人あるを看て不顧は所謂無顧之悪人と可謂者也と深不

堪慨歎之候尊師以て如何とするや伏して御配慮奉願候」と記している。実際に日薩は、一八七九（明治十二）年六月に事業を開始した「福田会育兒院」に関わっている。「福田会育兒院」は、一八七六（明治九）年三月に臨濟宗の今川貞山や杉浦讓、伊達自得によって発起され、仏教の宗派を超えて集まった僧侶や民間人、後には皇族に支えられて運営された事業体である。^{⑤6}日薩も一八七八（明治十一）年九月からの会合に参加するようになったようである。^{⑤7}一八七九（明治十二）年に有志たちが日本橋南茅場町智泉院内に仮事務所を置き、規約を設けて東京府庁に上申、二十一日に許可を得た。同年四月一日には内務省にも同様に育兒院設立を上願し、十八日に許可を得ている。^{⑤8}四月二十六日の会合では、投票を以て新居日薩が会長として推挙された。ちなみに、設立当初の役員は以下の通りであった。会長 新居日薩、幹事 大崎行智（真言宗）、今川貞山（臨濟宗）、五古快全（真言宗）、石泉信如（天台宗）、会計監督 洪沢栄一、福地源一郎、益田孝、三野村利助、洪沢喜作、大倉喜八郎^{⑤9}

「福田会育兒院」の設立経緯は、日薩の書簡が送られるほぼ四年前、一八七五（明治八）年七月二十四日の『教会新聞』上に大内青巒が孤兒院設立を促した事に発端の一因があると考え

ている。これは、『福田会孤児院説教録』中にこの新聞記事を引用していることから間違いないと思われる。その一部を紹介すると「兼て聞ク西洋ニハ棄児院トイフモノアリテ棄児をソダツル所アリト今我國ニテコレヲノ所アリシナラバマタコレヲ救フ一端ナラント西洋諸國ノ歴史ヲ略ソノ成立セシモト末ヨリソノ方法ナドヲ考カフルニ：（中略）：七宗ノ宗師ガタガタ一腰イレテお骨折アリシナラバ追々ニ心ライレカヘルモノ多クナルコトハ必定ナレバ如何ナル方便ヲメグラシテモ差当リテ一年ノ内ニ二三千人ニ及ブト云頼ム所ノナキ赤子等ヲ救ヒ養フノ手段ニハ育児院ヨリ外ニ仕方モナケレバ若シ彼ノ佛國ノピンゼントデプヨールト云人ノ貴キ跡ヲフミラナヒ会社ヲ結ビテ元手ニテモ募ル人ノアランニハタトヘ我々ノ如キ貧シキ暮シノ身ナリトテ如何デ多少ノ寄進ヲナサザランヤ」とあり、この提案が後に「福田会育児院」に結実したと言うことになる。

こうして一八七九（明治十二）年六月十四日に日薩を会長とした福田会育児院が、事業を開始することになった。その際、日薩自身も、資金を提供するのみならず、育児を何名か引き受けている。しかし、多くの職務を負っている僧侶が主体となつてゐることから、この事業もなかなか大変であつたと推察される。この点につ

いて『福田会沿革略史』では、以下のように回顧されている。「草創に属して未だ収養の場所なく、且つ発起の諸氏身出家にして、嬰兒養育事等固より経験なきに拘らず、窮民子女の入院を請う者あるや、直ちに快く之を引取り即ち福田行戒師五名、新居日薩師五名、今川貞山師三名、石泉信如三名、神保日淳師其他各一名、私費を投じて之を信徒又は里親に託して乳養せしめ、以て開院の実を行へり」。この内実からも、小野・清水が指摘しているように、「福田会は、仏教思想の慈悲救貧思想に基づくものであるが、寺院・僧侶のみの事業ではなく、仏教カラーをもつた民間の社会事業であるということもできる。」と言えるだろう。

日薩の事績の紹介として、最後に触れたいのは、やはり学校のことである。一八七五（明治八）年六月、日薩は宗規釐正会議（日蓮宗碩徳會議）を開き、「宗規釐正十八条」を決議した。これにより、教団組織と教育行政の統一がもたらされ、教育機関は、先に挙げた大教院、中教院、宗学所と再整理された。この年に飯高檀林は閉鎖され、その機能は二本榎に移された。これにとどまらず、さらに日薩は幼童時の教育も必要と考え、「沙弥校」の設立を発起することになる。「沙弥校募縁録序」の一文には「夫れ幼年と壯年とは、教育の道甚だ同じからず。故

に幼年の子弟をして、壯年生の学校に混在せしむるは、不利の尤も大なる者なり。而して未だ幼年学校の設けなきは、本宗の一大闕典と謂ふべし。是沙弥校を設くる第一の原因なり。」と記されており、その熱意が伝わってくる。一八八一（明治十四）年九月には、池上栄壽院に「沙弥校」を置き、大教院教師課を事務所とすることを決定、日薩自らが校長に就任することとなつた。その後、資本の募集などを続け、一八八三（明治十六）年九月九日に開校式を挙行した。日蓮宗大教院附属第一沙弥校の開校であつた。

五、親族の絆

四において、新居日薩の事績を簡単に述べてきた。日薩が明治新政府による国策の渦中で、日蓮宗教育を新たな枠組みの中で行い、かつ新たな教団行政を実行に移していったことをおおよそ紹介できたのではないかと思う。そこで最後に、新居日薩の事績は、各寺院の捨資のみならず、先に挙げた親類たちの協力があつてのことであることを示し、まとめたい。

まず、新居常七の娘のたけの逸話から見てゆきたい。新居たけによると、日薩がえらくなられたのは、いろいろな人たちの情けがあつたからであり、とりわけ大前の妙隆寺、柏崎妙行

寺、小机本法寺、大車院、僧侶の兄弟や友人たちなどの貢献の他、親戚たちが皆で世話をしたことにあると語っている。中でも、たけの父で日薩の弟の常七（近江屋近常）、日薩の兄である善兵衛とその子國太郎（福島屋）、また、兄の由兵衛の妻・まさの実家から来た岩崎作太郎の貢献を挙げる。岩崎は、前橋の生糸商であり、横浜で生糸の売り込み商を行っていた人物である。特に日薩が御経を版にしたり、本を出版したりしたときは、資本の供与者となっていた。例えば、新居日薩改正訓『妙法蓮華經』日蓮宗大教院蔵版 明治十三年五月二十二日御届同九月刻成は、資刻として岩崎作太郎の名が記載されている。たけによれば、大部の本の出版は、岩崎が資本であったと言う。一方、常七の方は、日薩が大教院で数学を始めて科目に入れた際、水筆習字用を兼ねた石盤を發明して贈ったと言われている。

逸事集に載せられているたけの話の一部をそのまま引用すると、「近常でも福島屋でも、出版だ、講社だ、御普請だ、巡回だ、諸方への寄付だと、随分貢いだものです、一生仕送りをしたのです。本門寺の御普請、御供所、中庸観などの時には、國太郎が千円、近常も岩崎も、みな出しました。沙弥校の時には、親類中ごとごとく、桐生の信者仲間も、みんな幾口かで仰せ

付かりました。福島屋は、育児院へも澤山だし、孤児を一時に三人も引き受けたことがあります。」とある。

既に示したように諸宗連合事業で始まった「福田会育児院」の活動は多数の人脈を用いて事業を展開していた。たけが語る通り、日薩が孤児を受け入れ、福島屋の新居國太郎が引き受けたものと推察される。一八七九（明治十二年七月一日の『読売新聞』「福田会育児院慈恵金広告」には、「金二百円（但五カ年納）久遠寺前新居日薩、金六百円（育児三人六ヶ年養料）同人」と載っており、一八七九（明治十二年九月十九日の『読売新聞』の稟告には、「二百円 横浜新居國太郎、一円 横浜新居るよ同とく」の記載がある。るととくは、一八七九（明治十二年十二月十一日の『読売新聞』の稟告「福田会慈恵金人名」にも一円の記載があり、一八八〇（明治十三年三月五日の同「福田会慈恵金人名」にも両者による一円の慈恵金「金広告」上の「金六百円 育児三人六ヶ年養料」の意味について、「直接金銭を寄附したのではなく、教童を引き取り、本人または縁者がそれを養育するのを寄附という名目にしたものである」と述べている。福島屋新居國太郎が養育していた孤児の中には、國太郎の金でアメリカ

カに留学させるはずが、結局、お金だけ出させて、アメリカには行かない者、また、上海に留学させて、さらにアメリカにも留学させた者もいるが、彼らは挨拶もしてくれないと、たけはかなり憤慨気味に述べているのも興味深い。

新居家の人たちのこの様な繋がりは、日薩の書簡からも判明する。もちろん親類のみに書簡を送ったわけではないが、各地に布教に出かけ、その先で親類に連絡をしている様から日薩の人柄や親戚との繋がりが見て取れる。

育児院関係では、一八八一（明治十四年）二月二十八日の新居國太郎宛の書簡に一年分の養育料三十円について意見を交わしている。この書簡からは、引き受けた一人は養源寺に置かれていたことがわかる。同じく國太郎宛の一八八四（明治十七年）九月二十六日の書簡では、嵐でつぶれた神殿のため、翌年三月まで金二百円を拝借したい旨の依頼をしている。利分は通例でとのことであり、これは純粹な借金かもしれない。とにかく、國太郎に資金を頼っている様が解る書簡である。

一八八四（明治十七年）十月二十二日の國太郎宛の書簡は、沙弥校関係の相談である。「沙弥校」の資本金三百六十円を受け取ったが、これで公債証を購入したい。何時購入したら良いかと、國太郎に問い合わせる内容である。ちな

みに、國太郎は、「沙弥校」の開設にあたり十口百五十円を出資しており、國太郎の妻とくが一口十五円、とくの母であり叔母のるよも一口十五円を出資している。國太郎は子の正太郎と福田会育兒院から引き受けた子を沙弥校に通わせている。⁽⁸⁶⁾

一八八四（明治十七）年十一月六日の書簡も國太郎宛であり、日薩は、人力車の仕様についての要望と、西洋襦袢を頂戴した御札、そして國太郎に齒の薬香水の依頼をしている。まだ未入手の襟巻は銀座の常七に使いを出す旨が述べられている。齒については、他の書簡に、興味深い内容が記されているので、後述したい。

一八八五（明治十八）年三月二日の國太郎宛の書簡では、日薩はワインやミカン、南京菓子などたくさん頂戴したことに御札を述べている。⁽⁸⁷⁾興味本位であるが、ワインはどのような物であったのだろうか。横浜にワインを主に輸入する商社、明治屋が店を開いたのは一八八五（明治十八）年である。明治屋が輸入したワインは、当初からボルドーから輸入した超高級ワインだと言われているが、横浜では、他の国のワインも手に入ったようであるし、横浜にいる國太郎のことなので、少なくとも輸入ワインを贈ったのではなからうか。日薩は、翌年、十一月十九日にも送られたワインへの礼状を國太郎

に送付している。⁽⁸⁸⁾丁度この頃から、ワインを広告で宣伝したりする活動が活発化している。日本では、一八七七（明治十）年前後から山梨県を筆頭に国産ワインの醸造に力を入れ始め、国内にも出回り始めていたのだが、一八八五（明治十八）年にフィロキセラが発見されたことでワイン醸造もかなり制限されるようになってしまっている。⁽⁸⁹⁾

一八八五（明治十八）年八月十一日の國太郎宛書簡は、家内一同、岩崎作太郎や新居常七にもよろしく伝えて欲しい旨、貸金が返金されるので直接國太郎の所に持って行くだろうなどの連絡事項が主な内容で、長崎からの便りである。⁽⁹⁰⁾一八八五（明治十八）年十二月十五日の國太郎宛書簡では、國太郎に送ってもらったブランドケットの御札や借金の御札と返済、「福田会育兒院」から預かった三名の子のことについて触れている。面白いのは、日薩は、常七から西洋の入歯を手に入れたらしく、「西洋入れ歯後はいかなる堅き物も並人と同様に食候」と記していることである。⁽⁹¹⁾

常七に宛てた手紙も残っており、一八八六（明治十九）年三月二十六日付書簡には、日薩が熱海に湯治に出かけた際、見舞金を頂いた御札が述べられている。國太郎や岩崎作太郎についても心配の気持ちや今後の打ち合わせのこと

を記している。⁽⁹²⁾同年六月八日の常七に宛てた手紙では、國太郎の病氣のことを心配している。この頃は、海外から入ってきた病原菌に悩まされている時で、日薩もこの流行り病のことを気にかけているのである。⁽⁹³⁾常七は、一八八〇（明治十三）年の桐生の寂光院の建築においても大施主となっており、寄付金額はなんと二千五百円である。ちなみに檀家惣代は、新居良助であった。⁽⁹⁴⁾

たけは日薩を評して以下のように語っている。たけの叙述をそのまま引用したい。「日薩上人は、坊さんで教育家でした。坊さんを教育し、信者を教育し、世界中を教育しようとなされたのです。政治家だの、豪傑だの、そんなちなものではありません。己むを得ず、そんな形に見えもし、見せもしたこともありませうが、私共は、矢張り尊い教育家のをぢさんだと思つてゐます。」⁽⁹⁵⁾新居日薩は、厳しい人物であったとの評価は間違いいではないだろうが、日薩の親類への書簡を見ると、業務打ち合わせなど仕事熱心なところと同時に親類縁者を常に心配し、贈り物に喜ぶ姿が見えてくる。

本稿では、一八七二（明治五）年前後に焦点を定め、それ以降の日本の社会を数名の人物の歩みから紹介してみた。特に明治初期は、本稿で紹介したように激動を経て新たな時代の始ま

りの時であり、国内にあってもまだいろいろな
 燻りを残しつつ新しい事に向かわざるを得ない
 時代でもあった。その中で、教育機関の設置に
 情熱的に尽くした人物、現在、立正大学の学祖
 と位置づけられている新居日薩は、明治の初期
 に、兄弟、縁者と互いに支え合い生きた人物で
 あったと言える。牧野内寛清は、「新居兄弟は、
 所謂「開化黨」であつたと見え、早くより郷里
 を出でて中央文化の洗禮に接せんことを望み、
 善兵衛、常七何れも、當時文明開化の咽喉で
 あつた横濱にいたり、兄は洋品商を営んで気骨
 ある商人として知られ、舎弟常七亦た豪膽を以
 て人に聞え、専ら外人相手の取引を行つた。」
 と新居家の人たちを紹介している。本稿で取り
 上げた新居家の人たちは、みなそれぞれ歴史に
 名を残す活躍をした明治時代の逸材であつたこ
 とは確かであろう。しかし、親類一同で助け合
 い成し遂げた成果として整理すると、兄弟同士
 で争う王位篡奪の歴史と比較して、より大切で
 暖かい何かを感じることが出来るように思われ
 るのである。二〇一八（平成三十）年は、一八
 六八（明治元）年から百五十年となる年であつ
 た。今後は、どの様な世になつてゆくのだろ
 か。

註

(1) 本稿は、立正大学の歴史を振り返るにあたり、学内の歩みだけを追うのではなく、一社会の中での立正大学像を描くことを思案していた佐藤と平の共同作業の結果である。本稿の原アイデアと新聞記事などを含む史料収集は、佐藤が以前から温めていたものであり、本稿はそれらの史料等を利用して平が執筆した。もちろん内容の推敲は、佐藤と共同で行っている。

(2) 内田星美『時計工業の発達』株式会社服部セイコー 昭和六十年 一四一頁―一七八頁。
 内田によれば、開港以降、時計の輸入が最初に確認されるのは、一八六二年のイギリス駐横浜領事ハワード・ヴァイスの報告中の「一八六〇年一月一日から一八六二年十二月三十一日に至る三年間の神奈川港の輸入貿易の比較表」においてであると言う。内田星美『時計工業の発達』一四一頁。

(3) この分野における研究文献は、古くは石塚裕道による研究を始め多数に上るが、ここでは、以下二つの文献のみを挙げるにとどめる。石塚裕道『日本資本主義成立史研究―明治国家と殖産興業政策―』吉川弘文館 昭和四十八年、鈴木淳『明治の機械工業―その生成と展開―ミネルヴァ書房 一九九六年。ただし、時計は、精密機械に分類されるだろう。

(4) 平野光雄『明治前期東京時計産業の功労者たち』

「『明治前期東京時計産業の功労者たち』刊行会 昭和三十二年 一頁―五頁。平野は、明治前期における和時計手工業者への影響を以下のように述べている。「明治維新の一連の諸変革―王政復古・版籍奉還・廃藩置県等々―と、欧米時計産業の日本市場獲得によって、和時計手工業者は致命的な打撃をうけ、急速に廃滅への道をたどっていったのである。すなわち、一般的に時計師及びその下職たちは、和時計の需要者を失い、したがって、生活の根柢を奪われてしまった。明治初年以來、大量に輸入されはじめたアメリカ製ボンボン時計に、和時計は、価格と精度において、到底対抗できなかったのみならず、明治六年一月の改暦に伴うヨーロッパ時刻法の採用は、和時計を更に「無用の長物」化したものである。」平野光雄『明治前期東京時計産業の功労者たち』四頁―五頁。

(5) 内田星美『時計工業の発達』一四一頁―一四六頁。内田は、とりわけ掛・置時計の輸入は、一八七三（明治六）年から飛躍的に増加していることを指摘し、これを改暦令の効果であると述べる。政府による改暦は、一日の時の細分割もまた欧米式の時分秒とすることを定めたからであるとしている。内田星美『時計工業の発達』一四二頁。改暦に関わる事件として、当時、世間を騒がせたのは、時計の需要よりも兎の投機的な売買であろう。所謂、

- 「兔バブル」の発生である。実際、改暦がこの
 免投機の原因となったとは言えないが、この
 頃の時代性を示す事件の一つである。詳細は、
 高嶋の論考を参照。高嶋修一「明治の兔バブ
 ル」『青山経済論集』六四―四二〇―一三年
 二二―一頁―二五―一頁。
- (6) 第二次世界大戦後、日本の時計産業は急速に
 成長し、西洋の高級ブランド時計は別格にし
 ても、世界に冠たるメジャーブランドにのし
 上がった。水晶式の腕時計を世界に先駆けて
 市販化したのもセイコーである。
- (7) 江戸時代より相撲の番付を模倣した温泉地の
 番付表などがよく知られているが、同様のもの
 が明治期の時計商についても作製されてい
 る。この番付表は、この頃の時計店を取り上
 げた文献ではよく引用されるものである。尾
 寄富五郎編『諸品商業取組評』錦誠堂 明
 治十二年。
- (8) 平野光雄『明治前期東京時計産業の功労者た
 ち』九頁。
- (9) 内田星美『時計工業の発達』三六頁―三七
 頁。
- (10) 平野光雄『精工舎史話』精工舎 昭和四十三
 年 二八頁―三〇頁。平野は、幕末において
 著名な江戸時計師を挙げている。広田利右衛
 門、大野規周、金田市兵衛、小林傳次郎、山
 本勘右衛門、大沼宗賢などである。平野光雄
 『明治前期東京時計産業の功労者たち』四頁―
 五頁。
- (11) 平野光雄『明治前期東京時計産業の功労者た
 ち』一〇頁―一一頁、平野光雄『精工舎史話』
 一四頁―一五頁。
- (12) 平野光雄『精工舎史話』一一頁―一二頁。
- (13) 内田星美『時計工業の発達』一四七頁―一四
 八頁。
- (14) 平野光雄『精工舎史話』一九頁―二五頁、平
 野光雄『明治前期東京時計産業の功労者たち』
 一七頁―二二頁。
- (15) 平野光雄『精工舎史話』二九頁―三六頁。服
 部時計店の成長は、服部による他店では行わ
 ない商売方法によるものであることが、服部
 自身によって回顧されている。
- (16) 牧野内寛清「新居日薩研究(一)」『明治仏教』
 明治仏教史編纂所 昭和十年一月 第二卷一
 号 六頁―八頁、牧野内寛清『明治佛教史上
 に於ける新井日薩』研精社 昭和十二年 一
 七頁、平野光雄『明治前期東京時計産業の功
 労者たち』一二〇頁―一三六頁。
- (17) 平野光雄『明治前期東京時計産業の功労者た
 ち』一二七頁―一三〇頁。
- (18) 『読売新聞』明治二十四年五月十日 公示、
 平野光雄『精工舎史話』三九頁―四〇頁。
- (19) 「東京時計商工業組合」は、「開時會」を始原
 とする組合であり、一八七七(明治十)年頃
 に小林傳次郎(二代目)によって結成された
 「開時會」のメンバーから発起人が選ばれ、一
 八九〇(明治二十三)年に「東京時計商組合」
 を結成し、後に「東京時計商工業組合」と改
 称された組合のことである。『明治前期東京時
 計産業の功労者たち』一三二頁―一三三頁、
 同 一七四頁―一七七頁
- (20) 平野光雄『精工舎史話』四〇頁―四一頁 東
 京『明治前期東京時計産業の功労者たち』一
 三二頁―一三三頁。
- (21) 平野光雄『明治前期東京時計産業の功労者た
 ち』一二二頁―一二四頁。
- (22) 「福島屋」は、弁天通二丁目に店を構えてい
 たことが、諸記録から判明する。一例として、
 一八八九(明治二二)年の時点ではあるが、
 以下の文献を挙げておく。藤野正年『横浜紳
 士公民録』横浜大川印刷所 明治二二年六月
 出版 八頁。
- (23) 新居たけ「近常と福島屋」清水龍山編纂『新
 居日薩』日蓮宗宗務院 昭和十二年 九七七
 頁―九八一頁。常七は、ボンボン時計の製造
 を早くに始め、國太郎は、弟の日薩が他界し
 た後、商売替をしたようである。新居たけ
 「近常と福島屋」九七八頁。蛇足であるが、先
 般、筆者が桐生市にある桐生歴史文化資料館
 を訪れた際、売店の担当者の方から「桐生の
 人たちは、新し物好きで古い物には興味がな
 い」旨のお話を伺った。もちろん、一人の方
 の話を一般化するつもりは毛頭ないが、その
 方の家は、現在は廃業してしまったものの、

- かつては織布製造工場を営んでおられたとのことである。伝統的な産業を守ってきた方からこのようなお話を伺えたことが新鮮であった。
- (24) 平野光雄『明治前期東京時計産業の功労者たち』一三三頁。
- (25) 平野光雄『明治前期東京時計産業の功労者たち』一三三頁—一三三頁。
- (26) 『読売新聞』一八八三(明治十六)年八月七日 朝刊。一八八六(明治十九)年五月にも十一日、十三日、十五日と読売新聞に広告を掲載している。
- (27) 深満池源次郎編『東京商工博覧絵 第二編下』日本博覧絵出版所 明治十八年五月 五〇頁。
- (28) 清水龍山編纂『新居日薩』六一八頁。
- (29) 桐生織物史編纂会『桐生織物史 上巻』図書刊行会 昭和四九年 一二二頁—一三二頁、同二九六頁—三〇四頁、桐生市史編纂委員会『桐生市史 上巻』桐生市刊行委員会 昭和三年 七八二頁—七八九頁、同一〇〇頁—一〇〇三頁。
- (30) 新居氏略系図『桐生織物史 上巻』九七頁—一七五六(宝暦六)年二月に亡くなった新居藤右衛門は浄運寺に埋葬されていることや、善兵衛や常七の新居本家佐吉の菩提寺も浄運寺であることから、新居家として血縁関係であることは確実であろう。
- (31) 桐生市史編纂委員会『桐生市史 上巻』七八二頁—七八九頁。
- (32) 桐生市史編纂委員会『桐生市史 上巻』一〇〇三頁。
- (33) 桐生市史編纂委員会『桐生市史 上巻』七八六頁。
- (34) 「日薩和上略傳」清水龍山編纂『新居日薩』六一七頁—六二二頁、新居ひさ『桐生での話』清水龍山編纂『新居日薩』九七一頁—九七七頁。平野光雄『明治前期東京時計産業の功労者たち』一三三頁—一三六頁。
- (35) 吉田松陰は、伝馬町牢屋敷に収容され、一八五九(安政六)年に斬首されている。この牢屋敷は、出火の後に取り壊され、空き地となった。牢獄の機能は、市ヶ谷に移された。跡地となった当所を清浄な土地と、設化布教の道場にしようと思いついた深川浄心寺の江上勝義や檀家の鈴木伊兵衛たちが、日薩や日鑑に相談した後、一八八二(明治十五)年にこの土地を購入、祖師堂を建立し、一八八三(明治十六)年に開堂式を行った。その後、当地は身延別院となった。清水龍山編纂『新居日薩』六九三頁—六九四頁、東京都編纂『東京市史稿』市街篇 第五十七 昭和四十年 三二二頁—三二四頁。
- (36) 清水龍山編纂『新居日薩』五七八頁—五九〇頁、宮川了篤『新居日薩の生涯』新居日薩和上百遠忌顕彰会編『日薩和上百遠忌記念集』
- 山喜房書林 昭和六十二年 五三頁—六二頁。
- (37) 牧野内寛清『明治佛教史上に於ける新井日薩』四四頁—四五頁、清水龍山編纂『新居日薩』六四三頁、宮川了篤『新居日薩の生涯』『日薩和上百遠忌記念集』六六頁—七〇頁。
- (38) 宮川了篤『新居日薩の生涯』六八頁、浜島典彦『日薩の布教活動』『日薩和上百遠忌記念集』一三三頁。
- (39) 小川原正道『大教院の研究 明治初期宗教行政の展開と挫折』慶應義塾大学出版会 二〇〇四年 三頁、清水龍山編纂『新居日薩』六四九頁—六五〇頁。教部省は、まず芝の承教寺を「仮小校」として講義を開始するように通達を出したが、仏教側は、芝の増上寺に仮の教院を設置することを想定した。小川原正道『大教院の研究 明治初期宗教行政の展開と挫折』八頁、同 三七頁(註二〇)。
- (40) 明治五年五月『太政類典』第二編 第二百五十卷 十六頁—十七頁 太政類典から引用したが、五月十三日に提出された建白書とほぼ同内容であろう。詳細な研究は、小川原の研究を参照されたい。小川原正道『大教院の研究 明治初期宗教行政の展開と挫折』四頁—九頁。
- (41) 小川原正道『大教院の研究 明治初期宗教行政の展開と挫折』七頁—九頁、同 三三頁—三五頁、同 三八頁 新居日薩も島地の運動を支持した。牧野内寛清『明治佛教史上に於

ける新井日薩』一四三頁―一四九頁。

(42) 清水龍山編纂『新居日薩』五九三頁―五九四頁、同 六六一頁―六六四頁。三戸勝亮「宗教院第一世」『新居日薩』八五五頁、金山日晋「二本榎時代記」『日蓮主義』第十一卷第六号昭和十二年 二八頁―三一頁、脇田堯惇「三十年來の記憶」『雙榎學報』日蓮宗大檀林同窓会 明治三十六年三月 第一号 一一五頁―二四頁。立正大学は、二〇二二年に開校一五十年を迎えるが、その起点は一八七二（明治五）年の日蓮宗小教院の設置に置いている。その理由として、『立正大学の百二十年』では、「神仏合併大教院」の設立に対抗して「日蓮宗小教院」を設立したのである。この「日蓮主小教院」が後に「日蓮宗小教院」と通称するようになったところから、一八七二（明治五）年の「日蓮宗小教院」設立をもって立正大学学園の開校の年としたのである。」と述べている。大学史編纂委員会『立正大学の百二十年』学校法人立正大学学園 平成四年九頁。また、一八七三（明治六）年にこの小教院（宗教院）入学した脇田は、この小教院（宗教院）について以下のように述べている。「抑も此宗教院なるものは、明治五年合併大教院起こると同時に、我先輩の諸師が大いに將來に見るところありて、一宗独立の経営によりて起こったのである、即諸宗に先鞭を着けて、自治的に独起独立したのである」脇田堯

惇「三十年來の記憶」『雙榎學報』第一号一一九頁。ちなみに、日蓮宗の諸教院や檀林の蔵書について丁寧な解説されている小此木の以下の文献も、明治期の諸教院の歴史やその教育について手掛かりを与えてくれるものであるので、参照されたい。小此木敏明「立正大学図書館略史（品川キャンパス）」古書資料館前史として 第六回『立正大学古書資料館通信』第六号 立正大学図書館品川学術情報課 平成三十年三月。

(43) 金山日晋「二本榎時代記」二九頁。金山日晋は、この時代記において、小教院には門下各派の学生が集合している故、日々の法要にも苦心したらしいと述べている。その事情は当時の学務規定の条文が物語っていると云う。「一、朝暮勤経は諸派共ニ学校中者同様之事」。同 二九頁。

(44) 清水龍山編纂『新居日薩』六七九頁。
(45) 東京都編纂『東京市史稿』市街篇 第五十四昭和三十八年 三〇四頁―三〇五頁、浜島典彦「日薩の布教伝導」『日薩和上百遠忌記念集』一六頁―一八頁。

(46) 一八七二（明治五）年十月三日、七宗（真宗、真言宗、時宗、浄土宗、禅宗、天台宗、日蓮宗）に教導職官長を各宗一名置くことになった。この時、日蓮系の各派は一致派と勝劣派に分かれていたが、ここに日蓮宗と総称して、交代制で管長を置くことにした。しか

し、一宗一管長制度も教義の違いや管長選出の問題があつて、再び分裂することになった。そして、一致派は初代管長として新居日薩が、勝劣派は、八品派の釈日実が初代管長となった。「近現代の日蓮宗と他教団」中間報告『現代宗教研究』第二九号 平成七年三月 五六頁―五七頁

「日蓮宗中一致派を日蓮宗と単称し勝劣派五派別立を許す。」二月二十七日 太政類典第二編第四類 第二百六十七卷 二十頁

(47) 浜島典彦「日薩の布教伝導」『日薩和上百遠忌記念集』一一六頁―一一八頁。

(48) 安中尚史「二 日蓮宗大学林の設立について」立正大学博物館『立正大学のあゆみ』（立正大学博物館 第四回企画展 展示図録）平成十九年七月、牧野内寛清『明治佛教史上に於ける新井日薩』八一頁―八六頁、宮川了篤『新居日薩の生涯』『日薩和上百遠忌記念集』七六頁、小此木敏明「立正大学図書館略史（品川キャンパス）」二頁。この時の日蓮宗の動きは、脇田によつて鮮明に語られている。以下、「三十年來の記憶」から引用する。「そこで諸宗は周章狼狽して、各々教院とか教校とかいふものを設けたが、本宗は既に已に此に見る所ありて、二本榎に宗教院なるものが設けてあつたから、所謂及未陰雨綳繆牖戸ものにして、豫め自治的に宗教院が出来て居る、是れは先師先輩の明、然りを得たのであるといは

なければならぬのだ。」脇田堯惇「三十年來の記
憶」『雙椽學報』第二号 二二〇頁。

(49) 浜島典彦「日薩の布教伝導」『日薩和上百遠忌
記念集』一三二頁。

(50) 浜島典彦「日薩の布教伝導」『日薩和上百遠忌
記念集』一三二頁、この頃の千葉県の監獄に
ついては、以下の文献を参照。兒玉圭司「明
治初期における千葉県監獄の展開」『中央学院
大学法学論叢』第二二巻第一号 二〇〇九年
五九頁―八八頁。

(51) 浜島典彦「日薩の布教伝導」『日薩和上百遠忌
記念集』一三二頁―一三三頁、大平玄秀「教
誨師の始祖日薩上人」『新居日薩』九〇三頁―
九〇六頁。

(52) これは禁制高札を除去する令のことであり、
キリスト教の布教は開国後、直ぐに行われて
はいた。

(53) 日本キリスト教社会福祉学会編『日本キリ
スト教社会福祉の歴史』ミネルヴァ書房 二
〇一四年 五四頁―七〇頁、菊池章太「カト
リック修道女会による明治期の孤児救済活動」
『ライフデザイン学研究』十一号 二〇一六年
八〇頁―八二頁。この頃、日本に滞在するバ
リ外国宣教会の神父からの要請を受けて、修
道女を派遣してきたのは、サン・モール修道
会、ショファイユの幼きイエズス修道会、
シャルトル聖パウロ修道女会である。サン・
モール修道会に次いで、一八七七（明治十）

年に来日したのが、ショファイユの幼きイエ
ズ修道会の修道女四名である。彼女らは、
神戸において「聖なる御子」（サンタンファン
ス）と名付けられた児童養護施設を営むこと
になる。神戸に修道女が派遣されたいきさつ
は、菊池が紹介するところによると、当時、
関西には飢饉が続いており、貧しさのあまり
に捨て子があふれていた。そんな折り、キリ
スト教の神父が面倒を見てくれるといううわ
さが広がり、礼拝堂の前に子供が置きざりに
されるようになった。神父は子守歌を歌って
子供たちを寝かせ、ひもじくて泣かれたら砂
糖水を与えた、しかし、男の神父にはそれ以
上のすべはなく、横浜のサン・モール修道会
に頼るほかなかった。多くの子供が引き取ら
れていった。神戸にも修道女が来てくれたら
と神父は願っていたとのことである。

三番目に来日したのはシャルトル聖パウロ
修道女会の修道女たちである。一八七八（明
治十一年）年、函館に到着後、まもなく孤児院
を始めたことされる。翌年の函館の大火後は、
被災した貧困者を預かるため、孤児院を拡大
した。菊池章太「カトリック修道女会による
明治期の孤児救済活動」『ライフデザイン学研
究』八四頁―九三頁、日本キリスト教社会
福祉学会編『日本キリスト教社会福祉の歴史』
六二頁―六四頁。

ちなみに、これらの三修道会は、何れも、

棄児や孤児などを受け入れたり、児童を教育
する性格を強く持つ修道会である。

(54) 横浜山手で養育した子供たちは、メール・サ
ント・マルド（本名マリー・ジュステイー
ヌ・ラクロー）の手記では、「いつの間にかイギ
リス人とアメリカ人の愛らしい娘十二人、私
たちのもとに安らっています。」と記されてお
り、菊池は、この娘たちは混血ではないか、
と推察している。菊池章太「カトリック修道
女会による明治期の孤児救済活動」『ライフデ
ザイン学研究』八四頁―八五頁。

(55) 菊池章太「カトリック修道女会による明治期
の孤児救済活動」『ライフデザイン学研究』八
四頁―八五頁。

(56) 日本キリスト教社会福祉学会編『日本キリ
スト教社会福祉の歴史』六二頁―六三頁、菊
池章太「カトリック修道女会による明治期の
孤児救済活動」『ライフデザイン学研究』十一
号 二〇一六年。

本稿では、明治初期の児童養護施設を主
眼としたため、カトリックによる活動に限っ
て紹介したが、その後直ぐ、プロテスタント
による慈善事業も始まる。明治時代の宣教活
動全般を見るとプロテスタントの方が積極
な展開を見せており、特に学校の設立は顕著
である。プロテスタントはまた、農村伝道な
どにも積極的であり、関東では、群馬県の桐
生、伊勢崎、安中、千葉県では木更津、佐倉

などに教会を設立している。日本キリスト教

会社会福祉学会編『日本キリスト教社会福祉の歴史』五六頁―五七頁。

(57) 清水龍山編纂『新居日薩』三二八頁、浜島典

彦『日薩の布教伝導』『日薩和上百遠忌記念集』

一二三頁、小野文珠・清水海隆「福田会」の研究」『日本仏教福祉学会年報』日本仏教社会福祉学会 第十九号 昭和六三年。

(58) 一八七八（明治十一）年七月の会合にて会の

名称を福田会、養育施設を育兒院と呼称することが決定している。中里日勝編輯「福田会沿革略史」福田会 明治四十二年五月『回顧

五十年／福田会沿革略史』（日本〈子供の歴史〉叢書二七 久山社 一九九八年 所収。「福田

会育兒院」については既に挙げている文献、牧野内寛清『明治佛敎史上に於ける新井日薩』

一三九頁―一四三頁、宇部繁子「福田会育兒院創設とその後の運営を支えた組織―創設を支えた人々・下賜金・皇族名誉総裁・恵愛部

の分析から』『社会福祉』、小野文珠・清水海隆

「福田会」の研究」『日本仏教福祉学会年報』、清水海隆「日薩の社会福祉活動―福田会育兒院について―」『日薩和上百遠忌記念集』、北越

戒定「福田会と日薩上人」『日蓮主義』第二十一卷 第六号 等が基本的なものである。

(59) 宇部繁子「福田会育兒院創設とその後の運営を支えた組織―創設を支えた人々・下賜金・皇族名誉総裁・恵愛部の分析から」一〇〇頁

表六。

(60) 清水海隆「日薩の社会福祉活動―福田会育兒院について―」『日薩和上百遠忌記念集』一四

八頁―一五一頁、宇部繁子「福田会育兒院創設初期の規程・組織等の検討」『専修大学社会科学年報』第四五号 資料一、一四四頁、「福

田会孤兒院説教録 全』二頁―三頁。福田会

は、福田会育兒院規則、福田会慈恵金送附手続告白、福田会育兒院設置願、福田会育兒院慈恵金広告、福田会育兒院会計監査委員章程、福田会育兒会章程、福田会慈恵金取扱場所を銘記した全四頁の新聞広告を一八七九（明治

十二）年七月一日に出している。「読売新聞附

録七月一日」『読売新聞』一八七九（明治十二）年七月一日。この設置願いにおける各宗有志総

代は、以下の通りである。福田行誠（浄土宗）、

大崎行智（真言宗）、今川貞山（臨濟宗）、神保日淳（日蓮宗）、石泉信如（天台宗）、矢吹

信亮（天台宗）。

(61) 清水海隆「日薩の社会福祉活動―福田会育兒院について―」一五二頁。「読売新聞附録七月

一日」『読売新聞』一八七九（明治十二）年七月一日。

(62) 福田行誠・高岡増隆・多田考泉講述「福田会孤兒院説教録 全」明治十二年十月出版。なお、立正大学古書資料館蔵書の「福田会孤兒院説教録 全」は、見返しに明治十二年十月

出版と印字がなされているが、最初の頁に平

等一子と社寺局長桜井能監が記した署名の日

付は十一月となっている。他の版では、見返しには出版の印字がなく、奥付けに、明治十二年十二月十五日出版と印字がなされ、出版

人も記されている。

大内は、今川貞山は七月二十四日の『教会

新聞』の記事に大いに触発され、福田会開設につながったと後に記している。宇部繁子

「福田会育兒院創設とその後の運営を支えた組織―創設を支えた人々・下賜金・皇族名誉総裁・恵愛部の分析から」『社会福祉』第五十五

号 二〇一四年 九九頁。

(63) 福田行誠・高岡増隆・多田考泉講述「福田会孤兒院説教録 全」二六頁―二九頁、小野文

珠・清水海隆「福田会」の研究」『日本仏教福祉学会年報』三九頁―四〇頁。

(64) 清水海隆「日薩の社会福祉活動―福田会育兒院について―」『日薩和上百遠忌記念集』一五

一頁―一五三頁、宇部繁子「福田会育兒院創設とその後の運営を支えた組織―創設を支えた人々・下賜金・皇族名誉総裁・恵愛部の分析から」一〇〇頁 表六。「新居日薩」にもそ

の沿革が記されているが、日薩が会長となる

役員決定日以外は、年月とその位置づけに違い

がある。清水龍山編纂『新居日薩』七一頁。

(65) 中里日勝編輯「福田会沿革略史」五頁、清水

海隆「日薩の社会福祉活動―福田会育兒院に

ついて―」『日薩和上百遠忌記念集』一五二頁、

- 同 一六〇頁―一六一頁。
- (66) 中里日勝編輯『福田会沿革略史』五頁―六頁。
- (67) 小野文瑠・清水海隆「福田会」の研究』『日本仏教福祉学会年報』四〇頁。
- (68) 『部内宗規釐正條款』日蓮宗大教院 明治八年六月二十五日(本法寺所蔵)、牧野内寛清『明治佛敎史上に於ける新井日薩』八一頁―八六頁、小野文瑠「日薩の敎團改革の理念」『日薩和上百遠忌記念集』一八〇頁―一八三頁、脇田堯惇「三十年來の記憶」『雙椽學報』第一号 一二〇頁―一二四頁。
- (69) 「沙弥校募縁録序」清水龍山編纂『新居日薩』一六五頁。妙法新誌大四六号、四七号で公示された「沙弥校募縁録序」は、林竹二郎「日蓮宗沙弥校記」永壽院 昭和十二年六月九頁―十三頁、にも収められている。
- (70) 「日蓮宗第一沙弥学校第一回考課状」林竹二郎「日蓮宗沙弥校記」三十頁―三四頁、清水龍山編纂『新居日薩』六九〇頁―六九一頁、牧野内寛清『明治佛敎史上に於ける新井日薩』一〇八頁―一一八頁。
- (71) 浜島は、「日薩は自身が両輪と評した檀信徒組織と僧侶教育体制の整備にまず取り組み、はじめは政府への迎合策をとるがのちに日薩の試案を実施していく。」と述べている。浜島典彦「日薩の布敎伝導」『日薩和上百遠忌記念集』一三七頁。
- (72) 「近常と福島屋」清水龍山編纂『新居日薩』九七七頁―九八一頁。
- (73) 「近常と福島屋」清水龍山編纂『新居日薩』九七八頁―九七九頁。
- (74) 新居日薩改正訓點『妙法蓮華経』日蓮宗大教院蔵版 明治十三年五月二十二日御届 同九月刻成。
- (75) 「近常と福島屋」清水龍山編纂『新居日薩』九七八頁―九七九頁。
- (76) 牧野内寛清「新居日薩研究(一)」「明治仏敎」八頁。
- (77) 「近常と福島屋」清水龍山編纂『新居日薩』九七八頁―九七九頁。
- (78) 清水龍山編纂『新居日薩』七一頁―七二二頁。
- (79) 「読売新聞附録七月一日」「読売新聞」一八七九(明治十二)年七月一日、「読売新聞」一八七九(明治十二)年九月十九日、同一八八〇(明治十三)年三月五日。福田会育兒院は、一八八〇(明治十三)年六月まで、新聞紙上(「読売新聞」)に慈恵金人名を毎月公示している。
- (80) 清水海隆「日薩の社会福祉活動―福田会育兒院について―」『日薩和上百遠忌記念集』一六〇頁―一六一頁。
- (81) 「近常と福島屋」清水龍山編纂『新居日薩』九七九頁―九八〇頁、尺牘 一三三三 清水龍山編纂『新居日薩』五二七頁―五二八頁。
- (82) 補遺 二八一 清水龍山編纂『新居日薩』補遺并編輯經過報告 日蓮宗宗務院 昭和十二年六月 四頁―五頁。これらの子供の中には、後に、沙弥校が設置された際、当校に通わせる者もいた。
- (83) 尺牘 一七〇 清水龍山編纂『新居日薩』四五六頁―四五七頁。
- (84) 尺牘 一七四 清水龍山編纂『新居日薩』四五九頁。一八八五(明治十八)年三月二日の書簡にも、沙弥校の資本取り扱い銀行へ依託した旨の御札が述べられている。尺牘 一八一 清水龍山編纂『新居日薩』四六八頁―四六九頁。
- (85) 「沙弥校資金集高報告」(妙法新誌第六二、六三、六四、七三号付録 明治十五年九月三日―十二月二十三日) 林竹二郎「日蓮宗沙弥校記」二六頁、「沙弥校広告」(妙法新誌第七二号、明治十五年十二月十三日)『日蓮宗沙弥校記』二九頁。
- (86) 「第一沙弥校第三回考課状」『日蓮宗沙弥校記』六一頁。
- (87) 尺牘 一七七 清水龍山編纂『新居日薩』四六四頁―四六五頁。
- (88) 尺牘 一八一 清水龍山編纂『新居日薩』四六八頁―四六九頁。
- (89) 尺牘 二四七 清水龍山編纂『新居日薩』五四四頁。
- (90) 稲垣眞美「ワインの常識」岩波新書 一九九

- 六年 二頁―二四頁、福田育弘「葡萄酒と薬用葡萄酒の両義的な関係―明治期におけるワインの受容と変容―」『早稲田大学教育・総合科学学術院 学術研究（人文科学・社会科学編）』第六五号 二〇一七年。
- (91) 補遺 二八二 清水龍山編纂『新居日薩』補遺并編輯経過報告 五頁―六頁。
- (92) 尺牘 二二二 清水龍山編纂『新居日薩』五〇二頁―五〇四頁。
- (93) 補遺 二八三 清水龍山編纂『新居日薩』補遺并編輯経過報告 六頁―七頁。
- (94) 補遺 二八四 清水龍山編纂『新居日薩』補遺并編輯経過報告六頁―七頁。
- (95) この頃の流行り病は、コレラなど様々であった。そこで、ワインも薬用ワインが輸入されたり、薬用酒としてのワインを宣伝した時代でもあった。福田育弘「葡萄酒と薬用葡萄酒の両義的な関係―明治期におけるワインの受容と変容―」『早稲田大学教育・総合科学学術院 学術研究（人文科学・社会科学編）』第六五号 二五九頁―二六九頁。
- (96) 「桐生寂光院文書」「日薩和上百遠忌記念集」三五四頁―三六三頁。良助は、由兵衛の長男である。
- (97) 「近常と福島屋」清水龍山編纂『新居日薩』九七七頁。
- (98) 牧野内寛清『明治佛教史上に於ける新井日薩』一七頁。